

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 殿

福岡県病虫害防除所長

平成22年度病虫害発生予報第9号（12月）について

このことについて、病虫害発生予報第9号を発表したので送付します。

予報第9号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
冬春イチゴ	うどんこ病 ハダニ類	やや少 やや少	やや少 やや少	やや少 並
冬春ナス	すすかび病 ミナミキイロアザミウマ	並 やや多	並 やや多	並 やや多
冬春トマト	葉かび病	やや少	やや少	並
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病	並 並	並 並	やや多 並

<予想される向こう1か月の天候>

天気は、平年と比べ曇りや雨または雪の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は、平年並か低いでしょう。

降水量と日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目は平年並、2週目は低く、3～4週目は平年並か低いでしょう。

要素別確率（福岡管区气象台 平成22年11月26日発表抜粋）

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	40	40	20
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

この時期の病害虫で防除上特に注意すべき事項

1 施設果菜類の灰色かび病等の初期防除の徹底

ナスの灰色かび病、すすかび病、トマトの葉かび病、キュウリのべと病など、各種病害の発生が、平年より早い時期から認められています。

省エネ対策で、暖房機の温度を低く設定し二重被覆を行っている施設では、多湿となり灰色かび病が発病しやすい環境になりますので、送風機を稼働させるなどして湿度低下に努めて下さい。

また、病気が進展してからでは防除が困難になるため、初期防除を徹底しましょう。

2 トマトやウリ類のウイルス病の蔓延防止

トマト黄化葉巻病、キュウリ黄化えそ病、退緑黄化病などのウイルス病の発生が認められています。

これらウイルス病蔓延防止のため、発病株は見つけ次第抜き取り、処分しましょう。

また、これらの病害を媒介するアザミウマ類やコナジラミ類の施設内への侵入防止と防除を徹底しましょう。

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

発病株率 0%（平年 0.6%、前年 0.7%）

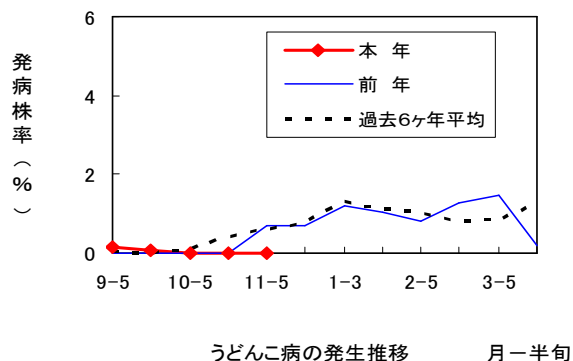
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 早期発見に努め、下葉かぎ後、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

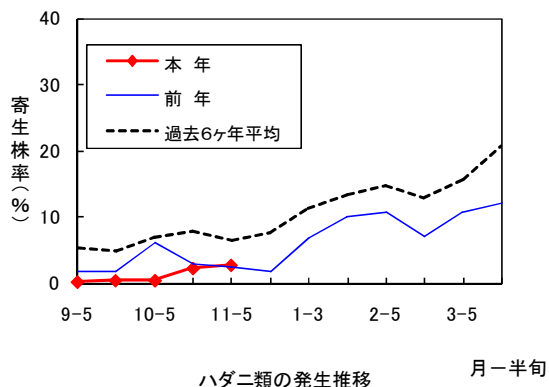
発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

寄生株率 2.7%（平年 6.4%、前年 2.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並とされている（±）。



(3) 防除上の注意

- ア 本種は、はじめスポット的に発生し、地面に接した下位葉ほど寄生が多いので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生を認めたら早めに防除を行う。
- イ 防除は摘葉後に行い、葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。
- ウ 摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。
- エ カブリダニ類等を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布する。

3 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

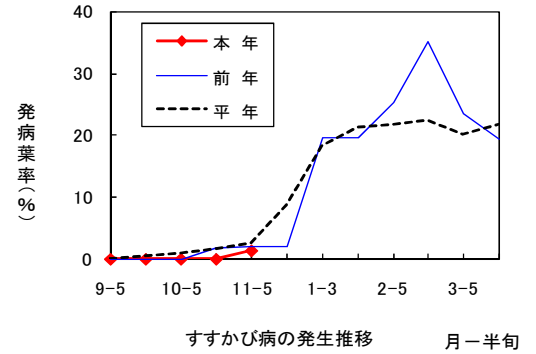
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 11月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
 - 発病株率 1.4% (平年 2.0%、前年 2.7%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 多湿条件下で発病が進展・増加するので、施設内の換気を図る。
- イ 病徴が進展してからでは防除が困難なので、発病初期に防除を徹底する。



4 ナスのミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

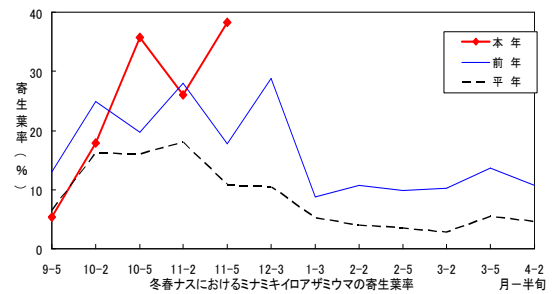
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 11月5半旬調査結果は平年よりやや多かった(+)。
 - 寄生葉率 38.3% (平年 10.8%、前年 17.8%)
 - 発生ほ場率 100% (平年 65.6%、前年 88.9%)
 - 被害果率 2.3% (平年 0.7%、前年 0.1%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 葉裏への寄生が多いので、散布むらがないように丁寧に散布する。また、多発した場合は、約1週間後にもう一度薬剤散布を行う。
- イ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の生息・増殖源を絶つ。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



5 トマト葉かび病

(1) 予報の内容

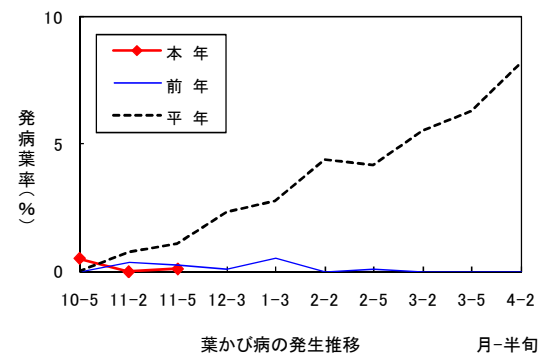
発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 11月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。
 - 発病葉率 0.1% (平年 1.1%、前年 0.3%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 薬剤は葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。
- イ ハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。



- ウ 肥料切れを起こすと発生しやすくなるので、適正な肥培管理を行う。
- エ 抵抗性品種を栽培しているほ場でも、葉かび病の発生に注意し、すすかび病の防除も兼ねて予防的な薬剤散布を行う。

6 キュウリべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

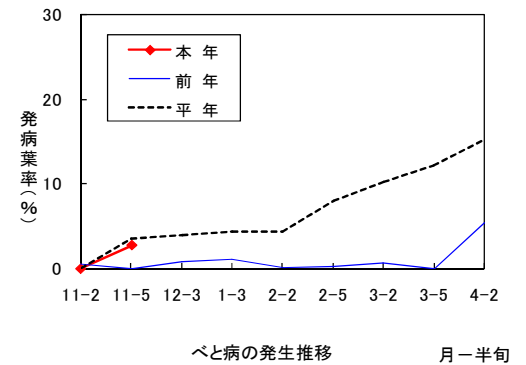
発病葉率 2.7% (平年 3.5%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、初期防除を徹底する。

イ 肥料切れや成り込みによる草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。



7 キュウリうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

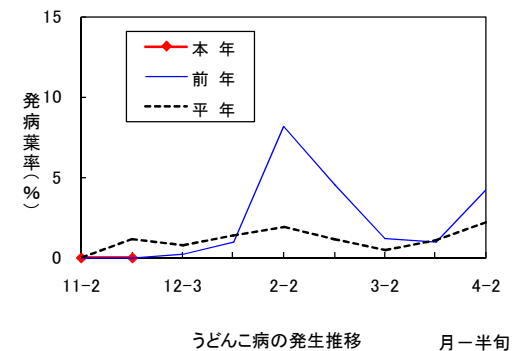
発病葉率 0% (平年 1.2%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か低く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉はできる限り除去するとともに、葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 窒素肥料の多用は本病の発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故を防止することを目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を、関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。散布者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などの※ラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。(例：スミチオン水和剤40 メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 飛散防止対策の徹底

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除について
ホームページでお知らせしています。

ホームページ
電子メール

<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
kfok0301@sp.jppn.ne.jp